特別講演

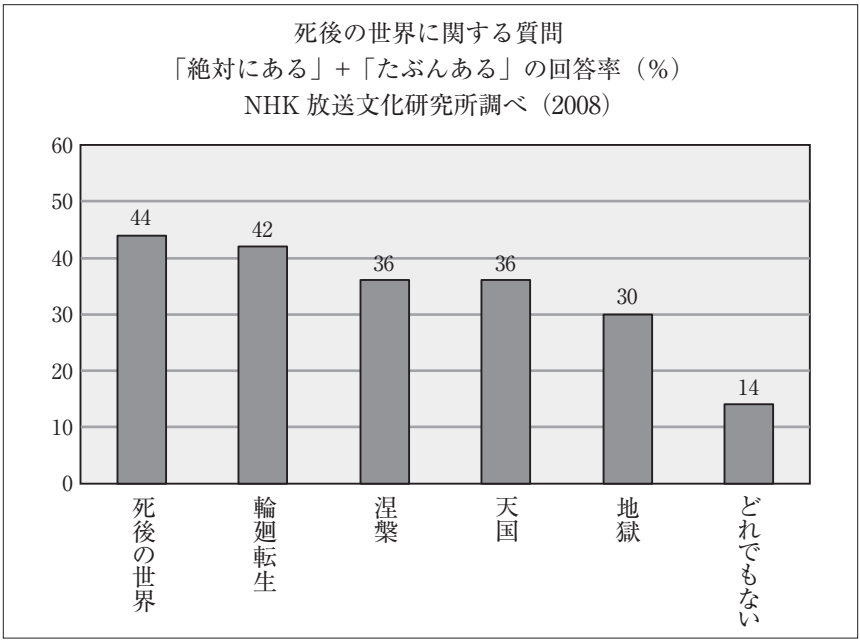
輪廻転生について

竹　倉　史　人

今日のテーマは輪廻転生ですが、私がこの研究を始めたのは母の死がきっかけでした。私が30過ぎた辺りで母ががんで亡くなりまして、そこからいろいろ考えるようになったのです。この突然の喪失体験は、やはり青天の霹靂というか、もうちょっと長く母と一緒にいるものだと思っていたので、いきなりいなくなってしまったという感覚でした。かなりの欠落感といいますか、ほんとに自分の体を半分持ってかれてしまったような、そういった感覚に陥りました。

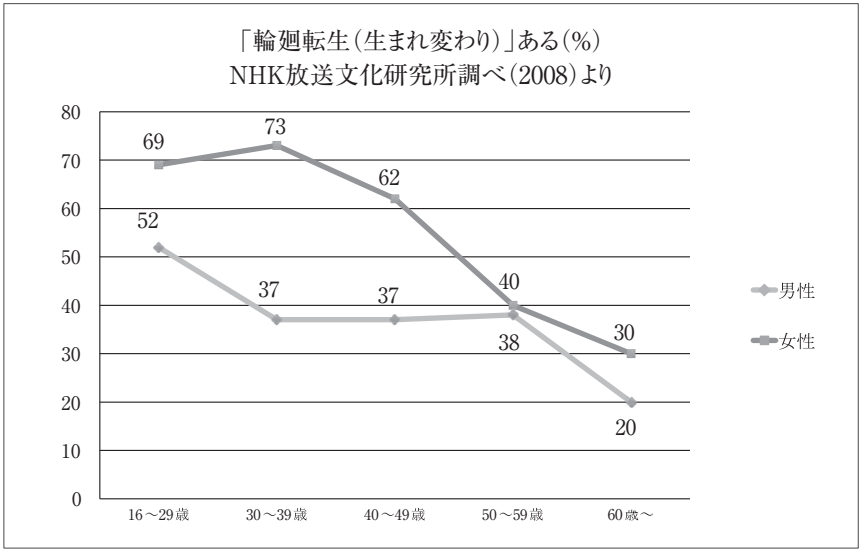
私は大学時代に宗教学を学んではいたものの、無宗教の家庭で育ったこともあり、死生観とか弔いとかに関して確固たる自分の軸を持っていませんでした。そういうこともありすごく混乱したんですね。母がいきなり亡くなって、さらさらの砂みたいな骨粉になっちゃって、「お母さんはいったいどこへ行ったのか」と。人間は死んだらおしまい、塵芥となって消えていくのか、あるいは、人間を構成するものの中に、物質とは異なる何かが存在しており、それは肉体の死後も存続するのだろうかとか、そういった素朴な疑問が生まれて、その辺りからやっぱりもう一回ちゃんと勉強してみたいと思うようになりました。それで東工大の上田紀行先生の門を叩き、「あらためて学問をやってみよう」という感じで、大学院に入学して人類学を学ぶことになりました。

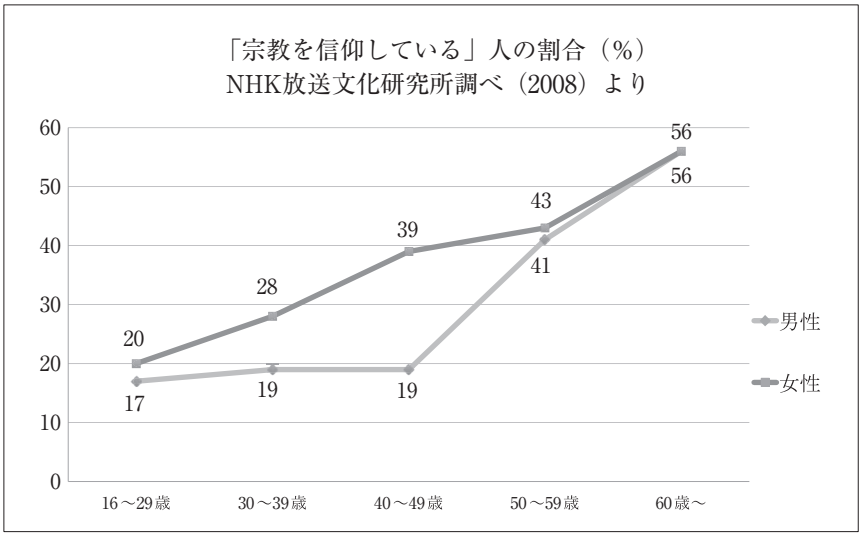
修士課程に在籍しているときに、死生観に関するいろいろなデータを集めていたんですね。そうしたら非常におもしろいデータに出会いまして、そこから輪廻転生について調べてみようということで研究が始まりました。



そのデータがこちらです。これはＮＨＫ放送文化研究所が2008年に実施した世論調査です。「死後の世界に関する質問」ということで、この中に「輪廻転生」という項目がありまして、じつに42％の人が、「絶対にある」「多分ある」と回答しています。日本の戦後民主主義的な空気では、もっと唯物論的な世界観が広がっていると予想しておりましたので「意外に生まれ変わりを信じている人は多いんだな」と思いました。そして、当然のように「日本はお寺も沢山あるし、仏教の教えが広がっているからこの数字になっているのだろう」と思ったわけです。

もう少し詳しいデータを見てみましょう。こちらは性別と年齢別に回答の内訳を示したものです。まず世界的にどこでもそうなのですが、やはり女性のほうが輪廻転生を信じる率が高くなっております。ただ右肩下がりになっていることからも分かるように、年齢層が上がっていくにつれて、生まれ変わりに対する信仰、ないしはリアリティと言うのでしょうか、そういったものが低下し


「輪廻転生(生まれ変わり)」ある(%)
NHK放送文化研究所調べ(2008)より
80
70
60
50
40
30
20
10
0
69
73
62
40
30
52
37
37
38
20
16～29歳
30～39歳
40～49歳
50～59歳
60歳～
男性
女性


「宗教を信仰している」人の割合（%）
NHK放送文化研究所調べ（2008）より
60
50
40
30
20
10
0
56
56
43
39
41
28
20
17
19
19
16～29歳
30～39歳
40～49歳
50～59歳
60歳～
男性
女性

ていきます。

問題はこちらのデータです。衝撃でした。調査を行ってみたら、なんと現代の日本人は、仏教徒であればあるほど輪廻転生を信じておらず、逆に無宗教であればあるほど輪廻転生を信じているという結果が出てきたのです。つまり、先程の私の予想は見事に外れているどころか、正反対だったわけです。これが、統計データが示していた事実でした。

そこから「輪廻転生って、そもそもどういう思想なのか」、「なぜ日本の仏教徒は、輪廻転生を信じていないのか」、さらには「外国の仏教徒たちはどうなのか」、「輪廻転生は仏教の基本的な教義ではないのか」等々、つぎつぎに疑問が生じたわけです。ということで、私は「輪廻転生」を研究テーマに設定して修士論文を書くことにしました。その後、講談社の方が興味を持ってくれて、修士論文に加筆したものを『輪廻転生――〈私〉をつなぐ生まれ変わりの物語』という書籍として2015年に出版することになりました。

実は先ほどの世論調査のデータというのは、国際社会調査プログラム（ISSP）というプロジェクトの１つで、これは世界中の40を超える国・地域で同じ質問をして、それを集計し国ごとに比較してみるというものでした。つまり日本の調査をＮＨＫ放送文化研究所が担当したということですね。ということで、諸外国の状況がこちらになります。

あなたは輪廻転生を信じますか？「あると思う」の回答率（%）

（出所：International Social Survey Programme,「宗教意識III」、2008）

1	スリランカ	68.2	11	ラトビア	33.6
2	台湾	59.4	12	イスラエル(アラブ人)	33.3
3	イスラエル(ユダヤ人)	53.8	13	ケニア	33.2
4	フィリピン	52.0	14	ウルグアイ	32.5
5	南アフリカ	45.0	15	ポルトガル	32.3
6	メキシコ	44.8	16	アメリカ	31.2
7	チリ	42.9	17	オーストラリア	30.9
8	日本	42.1	18	スイス	28.2
9	ドミニカ共和国	41.7	19	韓国	27.3
10	ベネズエラ	39.0	20	アイルランド	27.1

これを見て、私はまた非常に混乱したんですね。というのも生まれ変わりという考え方は、いわゆる「東洋思想」というか、インドとかヒンドゥー教とかそういうのが本場だよなあと漠然と思っていたからです。このランキング、1位のスリランカはいいですよね、国民の7割が仏教徒ですから。しかも、いわゆる上座部仏教が中心なので、輪廻という古層の教義が強く残っているのは当然です。

2位の台湾もチベット仏教が人気だったりするのと、その他に先住民がいたりするので、妥当な結果と言えそうです。ちなみにインド、ブータン、チベット、タイなどはISSPに参加していません。参加してれば間違いなく上位にランキングしていたでしょう。

さて、なんと言っても驚くべきはイスラエルです。ご覧のようにイスラエルのユダヤ人の半数以上が、「生まれ変わりを信じている」と回答しているのです。ユダヤ教は、カバラという神秘思想もありますが、一応、正統教義として生まれ変わりはありません。ユダヤ教はキリスト教とイスラム教とともに「アブラハムの宗教」と呼ばれますけれども、同じような死後観念を持っております。いわゆる最後の審判ですね。終末の審判で永遠の生命を手に入れるか滅びるかというような死後観念ですから、輪廻転生など起こり得ないわけです。ではなぜ、教義に書かれていないことが、半数以上のイスラエルのユダヤ人において支持されているのか。国民の9割以上がカトリックのフィリピンもそうです。その他にもメキシコ、チリ、ドミニカ、ベネズエラなど、中南米の国が10位以内にランクインしています。つまりこれらは仏教とは関係がない。これってどういう現象なのだろうかと思ったわけです。少なくとも生まれ変わりという考え方を、インドとか、オリエンタル、東洋的な思想だけと結びつけるのは間違いであるということが分かりました。

そこで私は、何か方法論的に工夫してアプローチしていく必要があると思い、まず生まれ変わりを「死を迎えた生命体が、直後ないしは他界での交流を経て、再び新しい身体を持って再生すること」と定義しました。このくらい抽象的に

概念を定義しておくと、大体、世界中のいろんな生まれ変わり観念がその中にグルーピングできるわけですね。そうすると、今、私が定義した生まれ変わりという観念を表す言葉が、世界中に膨大にあるということになります。

そしてその次に事象を単純化するために３つの類型を設定しました。１番目が再生型、２番目が輪廻型、３番目がリインカーネーション型。それぞれを簡単にご説明します。再生型は割とプリミティブなもので、思想とか哲学のような、あまり思弁的な感じで抽象化されてないもの、もっと、日常の儀礼とか神話とか、そういった水準で観察される生まれ変わりです。思えば自然の中にはいろんな循環の現象が見られます。季節もそうですね。植物も冬になって、葉っぱが全部落ちて枯れちゃって、「あれ、もう死んじゃったのかな」と思いきや、春になると、また芽吹いて、葉っぱが出てくる。月もそうです。だんだん欠けてって、「あ、いなくなっちゃったかな」と思うと、まただんだんだんだん満ちていく。そういった、いろいろな循環という現象が身近に見られる。そうすると「人間も一旦朽ちて、そしてまたよみがえってくるのではないか」とアナロジカルに理解されるわけですね。この再生型の生まれ変わりは、世界中の小規模社会、土俗社会に広範に見られる、普遍性の高いものです。

再生型では生まれ変わる先もローカルで、同じ部族の中とか、自分の子孫に生まれ変わるという考えがほとんどです。他界の観念に関しては、あの世とこの世は割と似た社会構造をしていて、あの世に行ったら向こう側で生活して、しばらくするとまたこっちに戻ってくるというような感じです。

仏教では、いわゆる業・カルマとか、そういった因果応報の思想と言いますか、倫理化された観念が見られるわけですが、この再生型というのは、生前の行為と生まれ変わりがあまり関係ない。むしろ葬送儀礼などにおいて、呪術が正しく執行されたかどうかで、死後の運命が決定される傾向があります。

次は輪廻型。これは、いわゆるインド発祥の生まれ変わり思想ということになります。先ほどは「循環」でしたが、今度は「流転」という言葉がぴったりですね。この輪廻型は後期ヴェーダの時代、紀元前大体1000年から500年頃に

インドで創出された哲学的思想で、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などに顕著に現れます。紀元前1500年ぐらいに、先住民のドラヴィダ人のところに、背が高くて色の白いアーリア系の民族が侵略した。そこを征服して生まれた宗教がいわゆるバラモン教と呼ばれるもので、バラモン教の経典が、いわゆるヴェーダです。このヴェーダの思想から生まれ変わりの思想も生まれたのであろうというのが、従来の説でした。

ところが最近になって従来とは異なる説が出てきて、私も本に書いたのですが、むしろドラヴィダ系の先住民が持っていた再生型の生まれ変わり観念と、アーリア人の持っていたヴェーダの宗教が混ぜ合わされて、そしてアーリア人たちがむしろ土着の再生型を吸い上げるような形で生まれたのが輪廻型なのだと私は考えています。その根拠は、拙著『輪廻転生』に書きましたので、今日は割愛しますけれども、いわゆるウパニシャッドと呼ばれる当時の哲学書を見ると、バラモン教の祭祀を司るバラモンたちが、自分たちよりも身分の低いクシャトリヤから輪廻の教えを習うというシーンが描かれているんです。そしてクシャトリヤには先住民と混血した人たちが多く含まれています。こうしたことからも、輪廻思想はバラモン教から生まれたというよりは、むしろ現地の再生型から生まれたと考える方が自然であると私は考えております。

輪廻型が牧歌的な再生型と大きく異なるのは、現世否定的なところがあり、また非常に高度に倫理化されている、つまり生前の行為によって、魂の行き先が決定するところです。再生型では自分の子孫とか、同じ部族内での転生でしたけど、輪廻型はどこに生まれ変わるか分からない。この地球上かどうかも分からないし、何なら動物や植物や、そういったものまでも含まれるような感じで、まさに「流転」という言葉で表現される通りといった感じです。

さて、アカデミズムの世界にいると、「お釈迦様が生まれ変わりみたいな馬鹿みたいな非科学的なことを言うわけがない。だから、そんな話は後の人たちが取って付けたのだろう」と考える人によく出会います。そこで原始仏教においてはどうかという視点で見ていくと、ブッダの教えに近い経典としてパーリ

仏典というのがありますが、その１つ長部経典『沙門果経』ではブッダ自身が次のように語るシーンがあります。

> あそこでわたしの名前は何某で、かくのごとき部族に属しており、このような容貌をしていた。あれがわたしの食べていた物で、わたしはかくのごとき悲喜の体験をし、そしてこれがわたしの人生の目的であった。そのような人生が終わると、こんどはあそこに生まれ変わった。そこでのわたしの名前は何某で……

原始仏典には他にも同様のエピソードが散見されます。つまりこちらも本に書きましたが、ブッダが前世の記憶を持っていた、いわゆる宿命通と呼ばれる力を修行の結果得て自分の前世を思い出せたと考える方が、学術的な観点からはより自然なわけです。後の大乗仏教などの存在によって話がややこしくなっていますが、やはり輪廻の思想というのが仏教の根本教義であることは間違いありません。

では、輪廻型が日本に入ってきたのは何時（いつ）かという話になりますが、最初の受け皿となったのは奈良時代の法相宗ではないかと思います。法相宗というと行基などの有名なお坊さんがいますが、当時の文献を見ていくと、やはり法相宗系の僧侶たちが、因縁であるとか、輪廻というようなことを書き残しております。

ではこれで輪廻思想が日本に定着していったかというと、実はそうでもありません。平安時代に入っていきますと、985年に源信（942～1017）という人が、『往生要集』を書いております。この『往生要集』の中に「厭離穢土」と題されるパートがありまして、いわゆる六道の中を輪廻するという記述があります。そこには「六道の中の最良の天道でさえ死からまぬがれることはできず、楽しみが多いぶん逆に臨終の際には大苦悩を生じ、地獄の苦しみでさえもこの十六分の一にも及ばない」、このようなことが書かれているわけです。そしてこの

思想は非常に流行ります。

源信自身は天台宗の僧侶ですが、彼は「浄土教の祖」とも呼ばれております。法然や親鸞に非常に強い影響を与えて、浄土教自体、大乗仏教から派生しているものですけれども、この浄土教というのが、だんだん日本の仏教の中で存在感を増していきます。とはいえ、「浄土」はあくまで最終解脱へ向けた修行の場ですから、そこに往生してゴールインというわけではありません。しかし、六道輪廻が浄土思想の中で語られることで、大衆信仰としては輪廻からの解脱を目指すというよりも、極楽浄土へ往生したいという救済観念のほうが支持されていった。これが浄土教という１つのブームとなって、鎌倉仏教において広がっていくということになります。

この背景としては、戦乱危機が平安末期から鎌倉時代にかけてあったことや疫病の流行も関係しています。1231年には「寛喜の大飢饉」というのがありまして、これで全国の３分の１の民が死んだと言われています。ちょうど日蓮上人が９歳ぐらいのときですね。幕府も御成敗式目の中で人身売買を一時的に合法化するという政策に出たりして、まさに世も末という状況でした。餓死した人とか疫病で亡くなった方など、市中には累々と死体があふれ、埋葬する余裕すらもない。そんな時代でした。

現代の日本はモノが溢れている時代です。こういう時代なら「いろいろ苦労もあるけど、恋愛したり、おいしいもの食べたり、いろいろ楽しいから、死んでもまたここに戻ってきてもいいかな」いう感じで、生まれ変わりという考え方が人々に支持されやすい社会背景だと思います。しかし鎌倉時代のようにどんどん人は死ぬし、お腹は空くし、病気になるし、戦争ばかりとなると「ちょっともうここには生まれてきたくないなあ。もっと良いところはないの？」ということで、浄土、もっと清浄な世界を希求し、「この穢れたところはもう嫌だ」という観念が強くなってくるというのは当然だと思います。なお現在の歴史学では、当時の不安定な社会情勢を引き起こした原因として、長雨や寒冷化といった気候変動があったことが指摘されております。

では平安以降の日本人の死後観念が浄土信仰に収斂していったのかというと、話はそれほど単純ではありません。柳田国男は、『先祖の話』のなかで日本人の基層にある死後観念について次のように書いています。

> 日本人の死後の観念、即ち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、恐らくは世の始めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。

死後それほど年月の経っていない霊はまだ個性を残していて、これが「ホトケ」と呼ばれる。浄めが充分でない、穢れているため、仏教的な供養を必要としている状態である、そして、49日から始まって、１周忌、３回忌、７回忌、そして33回忌をもって、「弔い上げ」とする。このように弔い上げすると、いわゆるご先祖様、祖霊化するということです。

上流社会の貴族とか武士は仏教に親しむ人も多かったわけですけども、地方の普通の貧しい農民たちの中には、必ずしも浄土教がすんなり広がっていったということでもなくて、むしろご先祖様は祖霊化して近くにいるという観念があったと柳田が言っているわけですね。

重要なことは、これは極楽浄土への往生を説く仏教的な死後観念とはまったく別種のものであるという点です。「浄土」は別名「十万億土」とも呼ばれ、この世（穢土）からは途方もなく遠く離れた場所にあります。となると、祖霊といえども毎年ひょいひょい戻ってこられるような距離ではありませんから、正月やお盆にご先祖様を家に迎えることも不可能になります。こうした矛盾をはらんだまま、浄土思想は日本人の生活習俗のなかに浸透していきました。

その結果、日本人の他界観念の中に、「ご先祖様は近くにいて、年に数回戻ってくる」という土着的な他界観念と、「死者の霊は、遠く離れた浄土へ往生する」という浄土思想とが併存することになりました。その後も日本ではこういった浄土思想と祖霊観念が共存しながら、何となく融合して、うまくぼかし

ながら今日まで至っていると柳田は分析しています。

ということで、冒頭で見たように、日本の仏教徒の多くがあまり生まれ変わりというものを重要視しない背景には、こうした浄土信仰や祖霊観念があったということですね。その意味では、インド的な輪廻思想は必ずしも日本には根付かなかったといえるかも知れません。

最後の３つ目の類型、これは現代において一番重要ですけれど、これがリインカネーション型と呼ばれるもので、19世紀のフランスで生まれたものです。アラン・カルデック（1804～1869）という教育学者が言い始めたことで、「受肉」を意味する「インカネーション」というキリスト教の言葉に、「再び」という意味の「リ」を付けました。先ほどのISSPの質問集の調査を見ると、多くの国がリインカネーションという言葉で生まれ変わりを表現していますが、実はこれは19世紀に生まれた新しい造語なんですね。

おもしろいのは、この頃は社会進化論というのが欧米で流行っていまして、これは1859年に出版されたダーウィン（1809～1882）の『種の起源』で決定的な思潮となりますが、「人間は進化する」という思想が拡張されて、「社会も進化する」という思想がリアリティを獲得していきます。

これを進歩史観と呼ぶならば、その対極にあるものが退歩史観です。退歩史観というのは、世界というのは創造された直後が最もより良い状態で、だんだん悪くなっていって最後には朽ちていくという考えです。仏教の末法思想というのは典型的な退歩史観といえます。

現在われわれは、進歩史観、今日よりも明日は良くなるし、明日よりあさってのほうがもっと良くなっていくはずだ、そんなふうに思っている人が多いと思います。でもこれはせいぜいこの200年ぐらいの間に出てきた、つまり産業革命とか、これだけテクノロジーが発達して、物質世界をわれわれがある程度コントロールできるようになってから出てきた考え方であって、実は人類の思想史のほとんどの部分は退歩史観です。どんどん世の中は悪くなっていく。これは実は自然な感覚で、世界というのは、アブラハムの宗教的な観点から言え

ば、神の手による被造物です。つまり、世界もモノ＝プロダクトなわけです。ということは、モノって、作られた直後はピカピカの新品ですよね。しかしどんどん使っていくうちに摩耗していって、最後、ぼろぼろになって壊れてしまう。世界も同じです。創造直後はいい調子ですが、時を経るにつれてだんだんオンボロになっていく。このように考えることの方がはるかに自然だったわけですね。ところが、先ほど言いましたように、現代の文明社会において終末思想というのはあまりリアリティがなくて、やはり進歩史観が主役です。これは文明圏における人類の感覚やパラダイムが近代の前後で劇的に変わったということです。

で、まさにこのリインカネーションというのは、そういった進歩史観、世界は良くなっていく、われわれは進化していくと、そういう時代に生まれた考え方です。われわれは死んで生まれ変わってというのを繰り返していきながら、霊魂を進歩＝成長させていくと言うんですね。そしてこの生まれ変わり、リインカネーションを何度も繰り返していって、最後には神に近づいていくことが目指されます。こうなってくると、もはや、修行して解脱するというような観念に非常に近いですね。カルデックはピタゴラスやプラトンの生まれ変わり思想なども大いに参考にしています。実は、リインカネーションと似た生まれ変わり思想は古代ギリシアにもあったんですね。

現在の日本語で言われる「輪廻転生」という観念も、元を辿っていくとカルデックに行き当たります。日本では1990年代くらいからリインカネーション的な思潮は顕著になりましたね。例えば2000年ぐらいからメディアにたくさん出てくるようになった江原啓之氏（1964～）の影響もかなり大きいです。スピリチュアリティ・ブームというようなものが巻き起こり、彼もまた極めてリインカネーション的な思想を説くわけですけれども、テレビや雑誌などによっても「何度も生まれ変わりを繰り返しながら霊魂が成長していく」という観念が広がっていきました。

これはカルデックも言っていますが、人生における苦難は、実は自ら選んだ

ものだと考えるのもリインカネーションの大きな特徴です。このレトリックといいますか、このロジックってなかなかおもしろくて、とても現代人の心に響くんですね。例えば、生まれつきハンデキャップを持って生まれてきた場合、輪廻型の文脈においては「おまえ、前世で何をしたんだ。こいつは多分、前世で悪いことをしたから、その因縁でこういう体で生まれてきたんだ」と言われることがあります。しかし、このスピリチュアリティの言説においては真逆です。「そのハンデキャップはあなたが自らの意志で選んだのだ」となります。なぜかというと、この世界はいわば修行の場なんですね。魂の筋トレみたいなものです。何も持たないでやるより鉄アレイでも何でも持って筋トレした方が効率いいですよね。つまり負荷をかけた方がトレーニングが捗るのとおなじで、いろんなハンデキャップや苦難があったほうが魂は成長できるということになります。その結果「自分は大きく成長したいから、より苦労の多い人生を選んだのだ」というロジックになる。そしてこれが個人主義を好む現代人の心には響くわけです。

さてこれで再生型、輪廻型、リインカネーション型という生まれ変わりの３類型について説明しましたが、それを踏まえて先ほどのデータを見ると、その内実をある程度分析できるようになります。

例えばフィリピンであれば、先ほど申し上げたようにカトリックの国ですけれども、20世紀の終わりにカルデックの教えが輸入されて大流行します。そのためフィリピンにはリインカネーション型の思想が見られますし、さらに英語が公用語になっていますから、アメリカからニューエイジとかスピリチュアルのようなカウンターカルチャーもどんどん流入しています。あとは先住民文化などもありますから、再生型もあります。これらがミックスしてこの数字になっているのだろうと思います。

逆にイスラエルのユダヤ人だったら、先住民文化みたいなのはありませんし、仏教的な輪廻の思想というのもほぼ見られない。ということは、この53.８％のうち最も大きい因子は、リインカネーション型だということが推察されます。

20世紀のフランスで生まれた思想が、おそらくアメリカを経由してではありますが、イスラエルのユダヤ人にも大きな影響を及ぼしているのだろうということが分かる。

そうやって見てくると、日本の42.１％という数字についても分析できるわけですが、実は、日本はこの３類型すべてが見られるのです。これは世界的に見ても珍しいです。

日本の再生型は、縄文時代からあったと考えられます。その痕跡らしきものは幼児の葬送において見られます。子どもの遺骸を土器に入れて、逆さにして底に穴を開けて、家の玄関のところ、竪穴住居の入り口に埋めてある例がいくつも発見されているのです。恐らくこれは、その上を女性がまたぐということで、子供の霊が早く生まれ変わってくるようにという、呪術的な葬送でしょう。しかも似たような習俗は近年まで日本の民俗社会にも見られました。ということで、再生型の観念は縄文時代から日本に存在してきたと思われます。

輪廻型は基本的には仏教伝来と一緒に日本にもたらされたと考えて良さそうです。先ほど言ったように法相宗などが受け手となって広がっていった。しかし、繰り返しになりますが仏教の教義としての輪廻思想は実は日本にはそれほど根付いていない。それでも輪廻転生を信じる人が４割を超えているのは、むしろ若い女性を中心にリインカネーション型が広がったためということになりますね。私は最初に42％という数字を見た時に、「ああ、日本は仏教国だからだな」と思ったわけですが、実は、このように類型化して分析していくと、それは間違いだったということが見えてくるわけです。

さて、それでは最後のトピックになりますが、私の修士論文は「救済論的資源としての生まれ変わり思想」というタイトルなんですが、これに関して説明しておきたいと思います。歴史上に輪廻やリインカネーションの思想が出現したのは、どちらも伝統社会に政治的・経済的な変動が生じ、より流動性の高い社会が出現した時期です。輪廻の思想が出てきた社会的な背景を見てみると、古代インドに勃興した仏教やジャイナ教、これが新しい宗教として興った頃、

その輪廻思想を支持したのはガンジス川中流域に出現した小都市に暮らす新興勢力でした。彼らの多くは商工業を営む富裕層や自由な農耕民で、バラモン教が支配していた氏族制農村社会の衰退によって登場した新しい価値観を持つ人たちでした。

どういうことかというと、当時、仏教というのはカウンターカルチャーとして出てきているわけです。バラモン教は祖霊祭祀が中心にあります。ご先祖様を供養するというのが教義の中心なんですね。氏族などの社会集団を非常に強い力で束ねる、統率する必要がある時代には、人間の生と死も権力によって管理されます。例えばバラモン教で言えば、司祭であるバラモンが人々の死後の運命を決めるわけです。バラモンは「みんなの死後の運命は、自分たちが正しく儀礼を執行するかどうかで決まる。だからみんな俺たちに逆らわないほうがいいぞ」という立ち位置を取れるわけですね。ところが、いわゆる新興勢力、都市部で氏族などのしがらみから自由になりたい人たちに受けがいいのは、ガチガチの厳しい先祖祭祀のバラモン教ではなくて、一人ひとりが修行していきながら成長していくっていう輪廻の物語の方なわけですね。そういう中で仏教やジャイナ教も出てきたし、輪廻の思想が人々から支持されたという背景があります。

リインカネーションの思想が支持された背景も似たようなところがあります。フランスではカトリックが非常に強い力で社会を統制してきたわけですが、革命後、カトリックはまさに旧体制の象徴であり、かなり叩かれます。そうした中で、新しい規範といいますか、カトリシズムに代わる新しい価値観、コスモロジーにみんな飢えていました。そういう時期にカルデックのリインカネーションが出てきて、一気に流行るわけです。

このように見ていくと、42%の日本人が生まれ変わりを信じている現代というのは、それこそブッダが生きていた頃とか、革命後のフランスの社会状況と通じるところがあるのかもしれません。戦後、急速に都市に人口が流入してきて、地縁・血縁というものから切り離された人たちには、この輪廻転生という

考え方がフィットするわけですね。地縁・血縁というバックボーンをすごく強く持っている人たちからすれば、たぶん別の物語のほうがフィットするはずです。そういう意味では、輪廻転生が現代において一定の支持を得ているというのは、やはり歴史的な社会背景と密接に関係していると考えられます。

さて、私は仏教の最も優れたところは汎用性の高さにあると思っています。全く色あせないというか、時代がどう変わっていっても尽きずに湧き出てくる知恵の源泉のようなものとして私は仏教を感じています。時代に合わせていくということが元々しやすい、そういったものを含んでいる教えだと思います。これは時代への最適化ということになりますが、やはり、これからのキーワードは「最適化」だと思っております。

これから日本はどういう状況を迎えていくのか、そしてその中で宗教が果たしうる役割は何なのかってことを考えた時に、まず、世界的にも類例のない超高齢社会を、われわれは迎えつつあることが想起されます。これはすなわち多死社会でもあり、毎日大量の人が死んでいくということになるわけですけれども、ピークと推計されている2038年には、年間の死亡者数がおよそ170万人、１日当たり4600人が死亡する計算になると言われています。１日に換算すると4600人の人が毎日亡くなっていく。これ、やはりすごいことだなと思うわけです。それ故、私は拙著『輪廻転生』の中で「『看取り大国ニッポン』に寄せて」という文章も書きました。

そうした中で、私が最後に触れておきたいのが、弔い、葬送儀礼に関することです。日本も都市化の進行によって、地縁、血縁というものが弱まっていき、個人主義的なライフスタイルがだいぶ浸透してきた。そうすると、通夜や告別式をやらない直葬とか、あるいは近親者だけでやる家族葬なんてものも流行るわけですね。さらには祖霊を祭祀するという観念も弱くなってきましたから、遺骨は自然の中に散骨するとか、血縁のない他人と合葬される永代供養などもOKの人が増えていくわけです。お墓もそうです。いわゆる「お墓のお墓」ですね、子どもたちに迷惑かけたくないと墓じまいをする人も増えているし、あ

るいは墓石の不法投棄が社会問題になっています。葬送儀礼もまた社会構造の変化とともに変わりつつあるということです。

先ほども申し上げましたが、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教というのは「アブラハムの宗教」と呼ばれていて、最後の審判で裁きを受けるわけです。正当な教義としては死んだ後、死者はお墓の中で眠っているわけです。最後の審判の日が来ると、裁きを受けるためにみんな一旦お墓からよみがえります。ちなみにホラー映画でも、日本だと幽霊が出てくるわけですけど、ヨーロッパだとゾンビが出てきますよね。ゾンビというのは、まさにお墓で眠っていた死体が間違って復活してしまって、町に出てくるという、そういう観念を表しているわけです。

ともあれ西洋社会では火葬は絶対ＮＧだったわけです。魔女裁判や異端審問で火あぶりの刑がありましたけども、あれはどういうことかというと、殺すだけでは生ぬるい、復活にすらあずかれないように遺体を燃やして存在ごと消してしまおうという発想です。

そういう訳で、今申し上げたアブラハムの宗教においては、火葬というのは考えられない、遺体を焼くなんてことは絶対ＮＧだったわけですが、ヨーロッパも人口が増加していって、お墓の敷地がだんだん足りなくなっていき、また公衆衛生の観点からも土葬が困難になっていくという中で、1963年に第二バチカン公会議というのがありまして、そこで火葬についてカトリックは正式にokというふうに、教義を変えました。最後の審判という教義がありつつも、火葬をokせざるを得なかったのは、宗教的な問題ではなく社会的な問題だったわけです。

こういった世の中の変化に対して、仏教というのは、ガチガチの教義で固めていくスタイルではなく、その時代に合った、まさに対機説法ではありませんが、社会構造の変化とか、産業構造の変化とか、そういったものに柔軟に対応できる教えだと私は思っています。私が修論に「救済論的資源」というタイトルをつけたのは、生まれ変わりという観念は、われわれがより幸福に生きるた

めの資源として活用できるはずだ、という思いがあったからですが、その意味では仏教は本当に多様かつ豊富な文化資源を保有しているわけですよね。

資源化するということは宗教を自己目的化しないということです。教義にせよ、教団にせよ、組織にせよ、私は何かを達成するための手段だと思います。それ自体が目的化してしまうと、だんだん硬直していって、やがて社会の変化にも柔軟に対応できなくなってしまいます。時代状況に最適化できない宗教は、やがて衰退して消滅していくことでしょう。

今後も、輪廻転生という死生観は日本人の間でまだまだ支持され続けていくと思います。葬送儀礼、墓のあり方も大きく変わっていくでしょう。輪廻型ではなくリインカネーション型の生まれ変わりが広がっている日本で、これから仏教はどのような戦略を立てて衆生を救済していくのか。このあたりが個人的な大きな関心としてあるところです。